

ポーランド文化はかなりの部分西欧文化圏に属していたといつてよく、このため実り豊かなルネサンス時代とバロック時代とを経験した。このバロック時代を継ぐ時代は、文化史上「啓蒙主義の時代」と呼ばれている。

この小論では、この時代の政治・社会の分野で大きな活躍をみせたH.KoŃtarski(1750-1812)とS.Staszic(1755-1826)の二人の教育に関する著作を少しばかり取り上げ、二人のポーランドにおける教育の現状認識、それに対する改革の意志と処方、そして後に実現した改革を考察し、彼らの国政改革の方向性がどのようなものであったかを考察し、最後に、ポーランド文化史上で啓蒙の時代が持っている一側面を明らかにしたいと考える。この時代の末には、近隣の三国によって国が分割され、国名が消滅するという、ポーランド近代史において最も激烈で悲しみの頂点をなす時代を迎えたのであった。この時代は「嵐の前」から「嵐の中」へ移行する時代であった、といつてよい。

I

18世紀のヨーロッパの政治舞台で主要な役割を果たしたのは、周知のように、西にイギリスとフランス、中央と東ではロシア、オーストリアとプロシアであった。つまり北方戦争(1700-21)の混乱を機にプロシアが王国となり、スウェーデンは没落し、ピョートルに率いられたロシアがヨーロッパの大国として登場してきたのである。18世紀の後半には重要な動きが多く、封建時代は終末を迎えつつあり、アメリカは独立し、フランス革命が勃発し、封建時代は最終的に崩壊したといつてよい。この時期にポーランドは、18世紀を通じ国家としては徐々に弱体化し、フランス派とロシア派の国内抗争を経て、ついに国の独立を失うに至った。プロシア、オーストリア、それにロシアによる三回の分割(1772、93、95)を経験したポーランドは、ここに「シュラフタ共和国」という黄金時代を失ったのである。

18世紀はヨーロッパ文化史の上で画期的な時代であった。ドイツの学者によってこの世紀の後半は「啓蒙期」と名付けられるに至り、またフランスを初めと

する多くの国々では、この世紀は「哲学の世紀」と呼ばれた。これらの新しい知的伝統はコペルニクや、イギリス、オランダ、フランスの学者、哲学者、評論家から始まったと考えてよい。この新しい潮流は17世紀にすでに始まり、18世紀にヨーロッパ中に発展し、広まった。

この運動の先験的役割を果たしたのは、フランスやイギリスからの知的亡命者の多かったオランダであった。啓蒙主義の先駆者を挙げると次のような人々となろう。R.デカルト(1596-1650)、F.ベーコン(1561-1626)、J.ロック(1632-1704)、I.ニュートン(1642-1727)、B.スピノザ(1632-1677)、それにG.W.ライプニッツ(1646-1716)。こうした人々が合理主義的、理性的思想を準備したのである。自然認識における理性の重要性と、その生活への応用を彼らは説いた。つまり17世紀以前の間人は、人間の日々の生活と自然現象との関係が超自然的な働きによって規定されていると考えていたが、遂に17世紀に至り、こうした問題を理性の働きによる研究の対象とした。やや後になると、人間は理性に導かれて「進歩する」という健康だが素朴な楽天主義まで抱くようになった。宗教的には、一切の神を信仰せず、物質のみを認める無神論の立場に立ったり、シャフツベリーやコリンズなどのように、創造主としての神を認める理神論の立場を説いたりした。

西欧の啓蒙主義について詳説することは省略し、ただちにポーランドの啓蒙主義における西欧からの影響を一瞥しておく、一般的には、①合理主義 ②感傷主義 ③古典主義 ④ロココなどの特徴がみられるといわれている。そして、ポーランドの置かれた当時の国際情勢ゆえに、これらの特徴の他に ⑤愛国主義、と⑥市民としての義務意識、がこの国の啓蒙主義の特徴となっているといわれている。啓蒙主義の時期に関しては、ひとまず1730年頃から、近隣三国によるポーランド分割による国の消滅を意味する1795年までと考えておこう。⁽¹⁾

II

まずこの時代に活躍した文化人を一瞥しておきたい。まずS.Konarski(1700-73)は、貴族の子弟の教育に情熱を傾け、ピャール学院の改革を行い1740年にワルシャワにCollegium Nobiliumを設立し、『効果的忠告法』を書いた。以下にしばしば言及される「国民教育委員会」(1773年設立)の構想を練ったのもこのコナルスキである。

後に国家的事業となる図書収集、文献収集などでポーランド啓蒙主義の土台を築いたのはJ.A.ZaŃuski(1702-74)を中心とするザウスキ兄弟である。またモレンスクの司教であり詩人であったA.Naruszewicz(1733-96)はボワロー風の諷刺詩を書き、また1386年までの6巻の『ポーランド民族の歴史』を書いたことで著名である。I.Krasicki(1735-1801)はS.A.Poniatowski王の側近としても活躍したが、とりわけバロック時代および同時代の古風な貴族階級の生態を描き、それをアナクロニズム的なサルマチズムと批判した諷刺詩集などで有名な文学者であった。彼の諷刺はなかなかパンチが効いていて大変におもしろい。

この時代の文芸潮流の非常に大きなものの一つにセンチメンタリズムがあるがその代表はF.Karpiński(1741-1825)である。彼は今でも歌われるクリスマスカラールを作詩したり、バロック風な『ラウラとフィロン』を書いた。

H.KoŃtatajはこの小論の中心人物であるが、政治、学問、教育の面で顕著な業績を上げた。政治家、政論家、学問の組織者、理論家、歴史家、哲学者、啓蒙思想家、そしてポーランドのロベスピエールというあだ名まで頂戴している。ただし彼が恐怖政治を敷いた、という意味ではないが。S.Staszicもこの小論の中心人物であり、地理・地誌、鉱山学をはじめとする自然科学の分野や行政官として顕著な業績を上げた。これらについては後述されるであろう。

自然科学の分野ではJ.Śniadecki(1756-1830)の活躍が目立っている。彼はクラクフ大学やヴィルノ大学で、主として数学や天文学の分野で活躍し、1790年にはポーランド地図を完成させている。

この時代はまた国民演劇が発達し始めた時代であるが、その創立者の役割を演じたのがW.Bogusławski(1757-1829)である。彼の作品には現在でも演じられている『奇蹟またはクラクフ人と山岳人』などがある。J.U.Niemcewicz(1757-1841)は、政治家、外交官としても活躍したが、英文学からの翻訳者、政治的パンフレット『大使の帰還』や、アメリカ体験記、それにポーランド史の名場面をうたう『歴史歌謡』などの作者として有名である。

最後に語学者・辞書編纂者として名高いS.B.Linde(1771-1847)を挙げておこう。彼はいわゆる『リンデ辞典』全6巻を1807-11年にかけて完成している。様々な分野でポーランドの啓蒙主義を担った人々は主としてこのような人々であった。

III

1989年の「ベルリンの壁」崩壊から東欧は政治・経済上の激変をみせているが、ちょうど200年をさかのぼったポーランドも政治の季節を迎えていた。近隣三国による第一回の分割を終え、更なる分割の危機に直面した国の上層部の人々は、ここに大胆な国政改革を目指した。そしてその成果の一つが「1791年5月3日憲法」となって結実する。アメリカの「合衆国憲法」→ポーランドの「5月3日憲法」→フランスの「1791年9月3日憲法」は、まさしく「環大西洋啓蒙革命」という視点で把握できる可能性も大いにあるだろう。⁽²⁾

「ポーランド人はイギリス人よりもはるかに立派な憲法を採択し、プロイセンの君主制に止めの一撃を与えた。ポーランドは遅かれ早かれ、西プロイセンを、そして東プロイセンもまた回復するであろう」⁽³⁾、というプロイセン外務大臣のヘルツベルグ(1725-95)の言葉にみられるような、このかなり民主的で、形式上も立派に整った「5月3日憲法」を準備し、その発布とともに副宰相の地位に就いたのがほかならぬH.コウォンタイであった。この節では、コウォンタイの教育に関する現状分析・現状認識と、それに対する改革処方とをみることにしよう。テキストとしては、「Stan oświecenia w Polsce」『ポーランドにおける啓蒙状態』や、「Raport z wizytacji Akademii Krakowskiej odbytej w r.1777」『1777年のクラクフ大学訪問報告』などの一次資料を用いる。

コウォンタイは、1768年に若干18歳でクラクフ大学の哲学博士号を獲得した後、70-75年までをウィーンやナポリ・ローマに留学し、神学やカノン法を修め、社会体制や教育制度に興味を持ち、当時のローマ教皇クレメンス14世に、クラクフ司教座聖堂参事会員の地位を与えられて帰国した。帰国後、王弟で、後に首座大司教となるミハウ・ポニャトフスキ(Michał Poniatowski 1736-94)の知遇を得て、三年程前に設立された「国民教育委員会」(いわば文部省にあたる)関係の「基本図書協会」における公務に携わることとなった。そしてこの仕事での熱意と才能を買われて、クラクフ大学の改革という大役を命ぜられることになる。歴史上の大変革には若い力が必要である。彼はこの時27歳になったばかりであった。

1777年より、クラクフ大学の改革に着手した。(大学の名称は Akademia Krakowska, Szkoła Główna, etc. 多くあり、あまりにも煩雑になるので、一応「大学」で統一しておくことにする。)彼は、いわゆる「大学のコロニー」と称された、大学付属中等学校の「新宮廷諸学校」の改革から着手した。この改革に

ついて一言すれば、いわゆる中等学校にもかかわらず教員にはすぐれたドクターやプロフェッサーを大勢起用していること、また現代風にいうカリキュラムが、かなり細部に至るまで指示されていることが特徴的であるといえよう。⁽⁴⁾

コウォンタイは77年に大学の wizytator(視学官)となって、前述のような視学官の「訪問記(報告)」を書き残している。1364年に建学されたこの由緒ある大学も、400年以上も経過するにつれて制度疲労を起こし、当時は「大洪水以前のマンモスの骸骨」と呼ばれていた程であった。

クラクフ大学の様々な欠陥がどこにあるのか、彼の言葉に従って少しばかり具体的にみてみよう。まず法学部に関しては、この学部が、カジミェシュ大王の大学設立の唯一の目的であり、最も期待された学問であるにもかかわらず、順調には発展しなかった。近隣のドイツやフランスでの法学研究が長足の進歩を遂げているのに、わが国はそれらの成果を取り入れることもせず、相も変わらずイタリア法学一辺倒である。そしてイタリア法学の一つの大きな欠点は、法曹界に弁護士(adwokat)ばかりを生み出し、自分の利害のみを気にかけて、物事を国のレベルなど大局的な観点から判断する真の国際人が育ちにくいことである。もう一つの大きな欠点は、古代ローマ法とユスチニアヌス法典から逸脱することを恐れてばかりいるので、ポーランドの立法者は、行政でも司法でも、すべてローマの先例に倣って、より良き政策や紛争解決策を考える努力を放棄してしまう。こうして今日まで法学士は、そこにある簡単明瞭な正義をみ、それを当事者に与えるよう努力するよりも、一生懸命難解なターミノロジィを学習することに生涯を捧げてきたのである。⁽⁵⁾

次に哲学学部の欠点については、大略次のように述べている。①古参教授の権威・権力が強力過ぎて、若手が実力を発揮する場がない。この故に、たとえば、コペルニクなどは自分がクラクフ大学の出身者にもかかわらずクラクフ大学の教授になれなかった。②大部分の学生にとって退屈であるcursus peripatetici(アリストテレス学派哲学)を若者は2年間好き嫌いを問わず聴講しなければならないが、これは即刻廃止すべきである。③数学・物理学・天文学等の学術の遅れは目に余るものがある。これらを改善しようと、つい先頃もクラクフの司教のザウスキ(Zafuski)が北ドイツの有名な哲学者でライプニッツの弟子筋にあたる Ch.Wolff(1679-1754)をクラクフに招き、数学と哲学の公開講演を企画したところ、古参の教授に、あのような異教徒の話を「純粹なるカトリック教徒」に聞かせるわけにはいかない、といって計画は沙汰止みとなった程である。ザウスキはしかたなく数学など自然科学を学ばせるためにシフィヨ

ントコフスキ(Swiątkowski)をハレに留学させ、ヴォルフの下で学ばせた。⁽⁶⁾

クラクフ大学において最も大きな問題を抱えていたのは医学部であった。この学部はコウォンタイにとっては、ほとんど体をなしていないように思われたのである。かつては多くの博士論文が書かれた医学部が、このように衰退してしまった原因には、たとえば首都のワルシャワへの移転というような社会的な原因もあり、王様、大貴族が移住するにつれて、クラクフの都市人口そのものが減少してしまい、医者職業自体が成り立ちがたくなっていった、などという事情もある。従って医者を養成する必要性も先細りになってしまったのである。

それにしても医学部をめぐる施設の貧困は目をおおうばかりである。解剖実習室もなければ、薬草園もなく、病院と呼べるものが町中になく。いやそれどころか教育スタッフも、教員がたった二名しかおらず、一人は大学付属の寮かなにかに住み込んで、貧乏学生の治療に当たっている、という。大学拡充・整備を心がけている者も、このドクターたち以外一人もいない有様とのことである。加えて学部の利益収入も年200ズウォーティに過ぎず、これでは一人分の教授が生活するだけで手一杯、とのことであった。

さらにコウォンタイの所見によると、驚くべき事実が指摘されている。安定した社会が続くと物事がいかに停滞し、退廃し、墮落してゆくかの良き見本かもしれない。つまりこの二人の教師は、全然講義することもせず、またその能力もなかったのである。そして、それにもかかわらず、この二人はクラクフに必要なだったのである。それは、①あらゆる薬局の訪問、監督、指導のため、また②当時外科的手術なども行った、あらゆる理髪師・かつら職人に対する試験をするため、なのである。薬局が、大学からではなく、お役所から許認可が下されるようになってから、まるで雨後のタケノコのように増え、修道院系薬局と世俗薬局を合計すると、クラクフでは食堂・レストランよりも多いくらいである。国民の健康を守り、医学の水準を底上げするためには、どうしても上記の二つの権限を大学に与えることが必要である、とコウォンタイは「国民教育委員会」に説いている。ペテン師の輩が地位を独占している、この医学部からまずクラクフ大学の改革を始めることが急務である、という主張を述べて彼は筆をおいている。⁽⁷⁾

IV

「ポーランドは何と遅れていることだろう！ 他の国々はどこまでもう達したことだろう！ どこかではもう専制政治は打倒された。ポーランドではまだシュラフタの寡頭政治だ。ポーランドはようやく15世紀を生きている。全ヨーロッパがもう18世紀を終わらんとしている時に！」⁽⁸⁾

このように、S.Staszicは彼の有名な著作、警世の書、名前もまさに“Przestrogi dla Polski”『ポーランドのための警告』（1790）の第36節を書き始めたが、このスターシツの思いが彼の生涯の基本姿勢を貫いていると言ってよいであろう。この節ではスターシツの教育に関する現状分析・現状認識とその改革処方箋などをみることにしよう。テキストは“Uwagi nad życiem Jana Zamoyskiego”『ヤン・ザモイスキの生涯注釈』（1785）のとりわけ「教育」を扱った部分や、『ポーランドのための警告』を取り上げたい。

スターシツ自身は貴族や士族の出身ではなく、いわば勃興しつつあるプチブルジョワ階級の出身（祖父、父ともにピワ市の市長を務めた）であり、この出身ゆえの苦労も多かったが、学問に秀で、ドイツやフランスに学び⁽⁹⁾、イタリアやカルパチアで学術調査を行ったりした経験から、彼の教育に対する姿勢が形作られているのであろう。いわゆるたたきあげ人生の人にふさわしく、彼は封建制の時代から近代へ移行しつつあるポーランドの発展の道を、政治ではなく、学問研究と農業経済に拠り所を求めていたのである。

彼の教育論の一つの特色は、その反神学性、反形而上学性である。健全な公民（obywatel）を養成するには、これらは不必要であると彼は述べる。「大学では、神学が他のすべてを圧して君臨していた。…ここから他の学問に対する軽蔑が生まれた。これが第一の誤りである」。⁽¹⁰⁾そして形而上学と論理学も不要としている。⁽¹¹⁾

彼によれば、教育の根底とは、各個人の生れつきの向き、不向きを知ることであり、それをわきまえてこそ教育方針が立つのである。人間は生来、善でも悪でもない、と彼は述べ、教育とは思考することを教えるものである、と書く。そして良き教育の第一の目標とは「人間の真の幸福に置かれるべき」である。——このように彼の教育論は、いわゆるベンサムやロックのような功利主義的哲学にその源を発していることがわかるであろう。

人間が有用であり幸福であるために必要な第一の科学は道徳科学（nauka moralna）と呼ばれよう。彼によると、道徳科学の中でも中心をなすのが「国史」

であって、ともすればポーランドの将来のエリートが父祖の歴史よりもルイ14世や15世の歴史の方を詳しく知っているのは本末転倒であると警鐘を鳴らしている。道徳科学を基礎づけるものは宗教である、と彼は述べ、神学と宗教をはっきりと区別している。

以上を総合すると、人間にとってのまず第一の基本的教養とは、道徳科学、自国の地理、自国の歴史記述、自分の郡の自然史、算術、実習を兼ねた幾何であり、第二の中等学校で学習すべきものは、隣国の歴史、民族の法、弁論術と国家財政学、国土の自然史、化学、経験物理学、外科学、数学（ただし単に経験物理学、外科学、数学（ただし単に理論ばかりではなく、むしろ軍事建築、もしくは一般建築、あるいは機械学への応用）であり、最後に高等教育で学ばれるものは、世界史、諸民族法、政治一般、詩学、天文学、自然史、化学、物理学、医科学が主となるべきである。⁽¹²⁾

スターシツの医科学に対する考え方も注目に価しよう。コウォンタイの医学教育の現場認識とはややニュアンスを異にするが、スターシツは医学それ自体が未熟であることをよく心得ていたように思われる。「医科学に関してはどうか教師が理論面を教え込むことは最小限に止めるように。また医科学は、自らの理論を持ち、知識となるためには、まだ十分な経験を持っていない。人間の生命現象に関する限り、大切なのは決して推量ではなく、常に明白性がなければならない。医者とは過度の推論判断によってすべてをダメにしてきた。経験から言うと、病状を知らない医者は、治療によって最も多くの人々を死に至らしめている。…」⁽¹³⁾

スターシツの教育論で強調されているものに、婦人教育の重要性と、体育・軍事教練の重視がある。「この世での最も大きな誤りは母親とおもちゃの人形から生まれる。これらは最初の養育であり、教育であるのに、肝心の女性たちは全然教育を受けておらず、誤って物事を考えている始末だからである」⁽¹⁴⁾とスターシツは女性教育の立ち遅れに苦言を呈している。この点の認識では、女性教育・婦人教育に関して同様な発言をしているコウォンタイと全く一致している。⁽¹⁵⁾

「行動的で、健康的で、強靱な肉体を持ち、幸福であった」古代人に比べて、現代人は魂や精神ばかり気にかけ、肉体的に不健康である。心・身の調和のとれた教育こそ重要であり、他のいかなる知識にも増して、体操と体育の授業が大切である。学校教育としては、まず教練を学び、次いで乗馬、戦術、要塞の建築、防衛、占領方法を、すべて理論とともに実地訓練をフィールドで行うこ

と。学校修了後、少しばかり狩猟が許可される。⁽¹⁶⁾——大略このようにスターシツは書いているが、体操、体育、スポーツ教育の重要性を説いた点で彼は先駆者であったといえよう。そしてまた、とりたてて軍事訓練の重要性を説いているのは、まさしく亡国の一步手前となっている、屋台骨のガタついた国家を救わんとするポーランド人の愛国的発露といえようか。

実際彼は、精神的・肉体的鍛練として軍事教練を重視しており、たとえ外国留学をする場合でも、自国での軍隊勤務を終了してからにせよ、と述べている程である。⁽¹⁷⁾それが国民としての最低限の義務だというのである。

外国留学に関しては、——コウォンタイもスターシツも若くして西欧を体験してきたわけであるが——あるいはその留学先で同国人を数多く見知っていたからであろうが——概して二人ともその効用については否定的である。コウォンタイの意見は一度訳す機会があったので⁽¹⁸⁾、ここではスターシツの意見を聞いてみよう。外国留学が現在流行の兆しを見せているが、公民精神の基本ができていない若者が外国へ行くと、外国風物に染まり易く、ポーランド流に生活しなければならない帰国後に支障をきたす、というのである。外国訪問は今やポーランド人の情熱となった。皆が外国にあこがれ、今ではポーランド婦人まで外国をさまよっている有様である。しかし、これは、われわれの体と衣服を変え、外国人の魂と風習に慣れさせることなのだ。彼の外国留学不要論を整理すると次のようになる。①印刷術の発明以来、外国での教育にそれ程の利益はない。②上述のような、ポーランド人としてのアイデンティティの喪失の危険を留学は伴う。③公民教育は、たとえばフランスはポーランドに比較にならぬ程劣っている。このため、一部の例外的な子供たちと学者を除き、留学は不要であり、「何らかの先入観で公民が自分の子供たちを他国の教育に送り出さないように、国民教育委員会は禁止の権力を持つべきである」⁽¹⁹⁾と述べている。学校教育が修了した時点で、公民教育が始まる。どうやらスターシツの現代社会に対する最大の悩みはここにあるようである。つまり、学校教育を修了し、ある程度の基礎的教育を受けた学生の身の振り方をどうするか、という難問である。恐らく当時も、現代と同様に、あるいは現代以上に、能力に見合った職場を見つけることは困難であったように思われる。彼は概略次のように書いている。17・18歳というのは両親が一番心配する年頃である。何故ならポーランドには一つも気晴らしがなく、兵士身分(*stan żołnierski*) [徴兵制のようなものか——土谷]がないからである。他のあらゆる国家では、若者の激情を軍役が引き受けているのであるが。ところがここでは若者は司祭になるか、

あるいは役所の見習い(palestrant)にでもなるか、あるいはぶらぶらするしかないのである。黒い僧服や修道服を着たいと思う者はもはや稀である。役所の見習いに子供を送ることを両親が恐れるのも、もっともである。わが国ではこの見習いこそが若者の墮落の始まりだからである。……役所の若者の監督もまた教育委員会に属するべきだと思われる。……わが国の種々の委員会には、相変わらず多数の市民が座り込んでおり、彼らは月給のためにワルシャワに勤め続け、委員会から委員会へと様々な取引のために絶え間ない行列を作り順番を待っている。議会も地方議会もこの無秩序を矯正することはできない。何故ならこれらの陰謀めいた人々を除いては官庁の役人に必要な情報を持っている市民は県にいないからである。こうした人々こそ公民学校(szkoła obywatelska)に引き寄せなければならない。——このように彼は教育論の結論部分で述べている。⁽²⁰⁾ 現代日本の官庁や国会議員宿舎への県や市町村職員による陳情風景などと相似た光景がこの時代のポーランドにも、見られたのであろうか。このような人々を教育し、しかるべき立派な職業人に仕立て上げることをスターシツは考えていたのであろう。そして公民学校を卒業して初めて、若者が公務員になれる資格が与えられるべきであると説いている。⁽²¹⁾

V

1773年7月のローマ教皇によるイエズス会解散はポーランドにとって実に衝撃的であった。「国民教育委員会」の成立も、教育改革の推進も、この一撃が出発点となっていよう。したがって、この時代とは、大きな歴史のうねりからすれば、教育がカトリック教会の手から、国家の手へと引き渡される過渡期であったといえるであろう。中世的な神学優位の時代から、科学的、実学的学問の隆盛への時代と言い換えてもよからう。

「国民教育委員会」の委員となった人々には、①ヴィルノ司教であったI. マッサルスキ、②国王の弟であった前述のM. ポニャトフスキ、③グニエズノの県知事であったA. スウコフスキ、④リトワニア大公国副法官であったJ. L. フレプトーヴィッチ、⑤ポドレ地方長官であった将軍A. K. チャルトリススキ、⑥リトワニア大公国書記官I. ポトツスキ、⑦元王国大法官A. ザモイススキ、それに⑧コパニッツァ代官(スターロスタ)のA. ポニンスキのような人々であった。

これらの人々のうち、M.ポニャトフスキ、フレプトーヴィッチ、ザモイスキ、チャルトリスキ、のいわゆる国王派は、——かなり乱暴な要約を許してもらえば——マグナートではなく、中流シュラフタ中心の中等教育の充実を願っていた。中流シュラフタにエリート教育を施すことによって、政治のマグナート支配から脱したいとの国王の意向が反映したこの考えは、たとえば、1765年に設立された授業料無料の士官学校 (korpus kadetów)、またの名を騎士学校 (szkoła rycerska)の実現にもみられる。いずれにせよ、人口の圧倒的大部分を占める農民や都市の貧困層、貧窮シュラフタの教育を充実させようとの考えは、まだ射程内には入っていなかった。

またマッサルスキ、スウコフスキ、ポニンスキを中心とした、リトワニアの大マグナートを中心とした地方分権的政府を目指した、いわゆるマッサルスキ派は、重農主義派でもあり、エリート教育よりも、むしろ教区学校での教育の充実を主張し、事実、農学や獣医学を農民に学ばせようと努力したといわれている。⁽²²⁾

教育実践家、教育思想家としては、すでに名前を挙げたようにS.コナルスキもいるが、彼は主として上層シュラフタやマグナートの子弟を対象としたエリート教育を目指したものと伝えられている。学費はずば抜けて高かった。⁽²³⁾

上記二つの節で、コウォンタイとスターシツの二人の代表的な啓蒙思想家の、当時の教育全般にわたる現状分析、現状認識を一瞥してきたが、これらの当時の教育実践家、思想家の中で、二人の占める位置はどこにあり、二人の特色はどんなところにあるのかをここで少しばかり考えてみたい。

コウォンタイは、科学、文学、哲学からはじまり政治にも手を染める程のパーспекティヴの広い人物であり、大学改革においても、最初は視学官として、後には学長として大いにナタをふるうこと10年に及び、1786年に一応その活動を終えた。いつも改革には反対勢力からの攻撃があるものであるが、この時も、クラクフの司教のS.Świątk(ソウトウィク)などから妨害やいやがらせを受けたり、また大学の私物化や大学資産の個人利用などという告発の動きもあったようである。すでに第Ⅲ節で述べた、大学改革案の作成などの他に彼の大学改造で果たした役割を列挙してみると次のようなものとなろう。

①大学学長の権限を制限したこと。

②道徳学部と物理学部の二学部 [コレギウム] を新しく創設したこと。

③古参の権威主義的な教授のかわりに、J.Śniadecki(1756-1830)やJ.Bogucickiのような有能な若手を登用したこと。シニャデツキは採用時、21歳

であった。

④保守派の反対を押し切り、科学重視の新カリキュラムを導入したこと。⁽²⁴⁾

こうした彼の活動を通じて、いよいよ哲学学部から物理学部が分離独立していく時代の趨勢がよくみてとれるであろう。自然科学発展の勢いをますます加速させるためにコウォンタイは骨折ったのである。自分で直接的に関係は持たなくとも、自ら重農主義者であった彼は、自然科学の農業生産への応用などを良く心得ていたのであろうか。コウォンタイの教育論でどうしても見落としでならぬものに、ポーランド語学習の強調がある。彼は正しきポーランド語の衰退の原因を、ステファン・バトールィ(1533-86、在位76-86)を始めとする歴代の王様が、外国から連れて来られ、ポーランド語をしゃべれず、理解しようともせず、フランス語やドイツ語で用を足していた、というやや意外な点に求めている。そして皆が上に倣うこととなり、大貴族から中小貴族に至るまで、皆外国語を良しとし、国語を軽視する風潮が生じたというのである。一国の文化水準の基本には正しい国語があるとし、彼は国語教育の必要性を説いている。⁽²⁵⁾

まがりなりにも貴族であり、若くして才能を認められ、国政改革時にはリーダーの一人となり、憲法を準備し、そして三国による国の分割後には見捨てられるというこの世の有為転変を味わったコウォンタイとは違って、スターシツは、その身分ゆえに長い間国政に参画することはできなかった。このために、彼は作品を匿名で発表せざるを得なかったのであり、また恐らくそのために彼の書いた文章は情緒的であり、時に激越な色調を帯びているのであろう。『ヤン・ザモイスキの生涯注釈』も『ポーランドへの警告』も実に世を憂う警世の書であるといつてよい。⁽²⁶⁾

スターシツの現状に対する批判の矛先は、一つは大貴族マグナート階級に対してであり、もう一つは一度は母親に勧められた僧職階級に対してであった。彼は信念として理神論を抱いていたから、死後の因果応報などは信ぜず、修道院的な教育を非生産的と見做し、中世風のスコラ哲学を拒絶した。

彼があくまで、公共の役に立ち、職業活動に密着した実学を目指し、実用科目の修業年限の拡大をしばしば説いていたことは上にみた通りである。こうして鉱山学や地理学、地政学を含む自然科学の重視、国の防衛やまた若者の「留学」という名の外国流失を防止することを目的として、兵役や体育を重要視したのであった。

コウォンタイによる道德学部の設立にもまま傾向がみられるが、スターシツも学習・教育の根底に、個人の道德や社会のモラルの問題を据えていることが

注目される。またしばしばポーランドの研究者によってルソーのスターシツに対する影響が語られるのであるが、確かに実物教育や体験教育を重視している点（体育や軍事教練など）は影響を受けている点であろう。さらに、彼の教育はかなり実用やフィールドワークを重視していたので、理論的な科目面や美学・美術方面の科目を欠いていたことが注目される。すでにみたように、医学に対しては、この学問の未成熟さを考え、ほとんどの理論は誤ることが多いとして、この方面に対する疑問を呈している程であった。このように考えてくると、スターシツの教育観は、神学・形而上学の時代がすでに去り、これからは国家有用の学、実学の時代である、という認識である、とまとめて良いであろう。とりわけ教育論の最終部分は、近代官僚国家制を夢みていたのではないかと思われる。⁽²⁷⁾

スターシツの生涯で特に顕著な活動をここで簡単にまとめてみると、まず第一に、彼が発起人となって、ワルシャワに学術愛好協会を設立し、自らの館を提供したことが挙げられるであろう。これは1808年のことであり、この学術愛好協会が姿を変えて現在のPAN（ポーランド科学アカデミー）に引き継がれている。そして学術の中心たる象徴の意味を込めて、協会の前にコペルニクの像を築いたことも、彼の功績に数えられるであろう。

第二に、ナポレオン公国時代に、農奴の個人的自由、人格的自由を認めたナポレオン憲法を歓迎した点が、彼の政治観を考える上で重要であろう。

第三に、学問的貢献としては、前述のポーランド全図の完成の他に『カルパチア地域の地質・土地生産(O ziemiorództwie Karpatów)』を1805-15年に出版していることが挙げられよう。

第四に、社会に対する貢献としては、あるいはこれが最大のものかも知れないが、自分の土地を農奴農民に解放し、学校、銀行や病院の完備した共同体、つまりモデルコミュニティを作ったことである。ユートピアを目指したコミュニティとして、イギリスのRobert Owen(1771-1858)のNew Lanarkが有名であるが、それに近いものがスターシツによって創立されたのであった。いや時期的に言えば、オーウェンに先行したのである。

第五に、スターシツの反大貴族的動き、反マグナートの、愛国的活動について一言述べておきたい。そこで彼の当面の相手はリトワニアの大領主チャルトリスキ「ファミリー」であった。彼の外国崇拜主義に対する反発は、この反チャルトリスキ主義と結び付いているとって良いであろう。スターシツは純粋な西欧崇拜一辺倒ではなかったのである。スターシツによれば、チャルト

ルィスキー門は、ポーランド風を脱ぎ捨て、外国風を身にまとい、その家館を外国人で満たし、子供にはポーランドに対する嫌悪感を植えつけ、諸外国を連れ回し、総じてポーランド的なものは、服装も言語も唾棄し、否定され、葬り去られるべきもの、との観念を植えつけたのであった。⁽²⁸⁾ ポーランドが西欧より遅れていることは認めているが、それだからといって言語や服装まですべて取り換えねばならない、という考えに与することはスターシツはしなかった。コウォンタイが、ポーランドの国語の衰退の原因は外国人王に起因するという奇抜な説を述べ、そこに若干の彼の愛国心の発露が認められるが、チャルトルィスキを中心とするマグナート階級の外国文化崇拜に対するスターシツの態度にも強い自国文化保護の姿勢がみられるのである。この意味において、彼もポーランド人としての自尊心・自恃心を強く持ち続けていたことが明瞭である。

VI

18世紀が啓蒙の時代であるとは、やはり西欧的概念が日本に輸入され、定着したものであろうが、当時の日本にも——恐らく単なる偶然の一致であろうが——この「啓蒙の時代」を準備した、独特な一群の人々がいたといっていよいであろう。司馬遼太郎の言葉を借りると、そのような「知的奇人」が日本の同時代に確かに存在していたのである。支配者が彼らに都合の良いイデオロギーを教え込み、たった一つの価値観を押しつけたのに対して、彼らは個々に別々の価値観を持ち、それを生涯をかけて追求してきたのである。もちろん彼らの事業や業績が直ちに同時代の周囲の人々に理解されるのは稀であったのではあるが。たとえば越後村上の農民出身で自然科学者、経済学者となり、有名な『経世秘策』を書き、重商主義を説いた本多利明(1743-1820)がいる。また出羽の貧農の出身で、本多の学僕を務め、天文、数学、地理、測量を修めて、探検家として名を成した最上徳内(1754-1836)がいる。また八戸の町医者であった安藤昌益(?-1762)は、徹底した平等主義へと健康な人間生活の大切さを説く『自然真営道』や『統道真伝』を書き、「知的奇人中の奇人」平賀源内(1728-79)は、本草学・物産学に秀で、エレキテルをはじめとする彼の発明・工夫は群を抜いており、文学にまで彼は手を伸ばした程であった。

18世紀末は、ベニョフスキ事件などもあり、いよいよ北方ロシアの船が日本

の幕閣を揺るがし始めた時であったが、こうした事情を背景に、蘭学を吉雄耕牛に学び、仙台藩の医者を務めながら財政政策にも関与し、そして当時の国際関係の書たる『赤蝦夷風説考』(1783)を書いた工藤平助(1734-1800)や、茨城の平凡な農民から幕府の蝦夷地御用雇に抜擢され、蝦夷や樺太探検で大いなる業績を挙げた間宮林蔵(1780-1844)また松田伝十郎(1769-?)などの士々多才がここに誕生するに至った。一つには日本の農業生産力が上昇し、ある程度の非農業生産に専従する余裕が生まれたのであろうし、また長い国内平和がこの余裕を加速するのに力を貸したのかもしれない。

18世紀日本は一瞥しただけでも以上のような「知的奇人」を数多く生み出したが、ヨーロッパ文明の辺境とみられるポーランドにも、この世紀は種々様々な知的巨人を生み出した。その一端は第Ⅱ節ですでに少しばかり触れたが、他の人々の業績をここでつけ加えてみることにする。

18世紀は、日本でも平賀源内などを頂点とする、博物学、鉱物学、物産学などが発達したが、ポーランドも次の人々を生んだ。たとえば、『必要で有用な植物』(3巻、1777-79)、『有用および有害な動物』(4巻、1779-80)、『植物事典』(1781-85)などを執筆し編集したK.Kluk(1739-96)、また『リトワニアの植物学』(1794)を出版し、ヴィルノに植物園を造り園長を兼ね、また回想記作者としても有名なS.B.Jundziłł(1761-1847)、それにクラクフ大学教授で、クラクフ付近の石炭をはじめとする鉱物の研究にいそしんだJ.Jaśkiewicz(1749-1809)などがいる。⁽²⁹⁾

また、18世紀末のこの国は、滅亡寸前という国難を抱えていたから、尚更のこと自民族文化とその基礎たる自国語について関心を持った人々が多かった。たとえば、すでに名前を挙げたS.B.Lindeの他に、その先行者として文法や言葉の正用規準の確定、また国民教育委員会での基礎教科書編集に携わったO.Kopczyński(1735-1817)や、言語の純正化を考え、それを保ったために、やや行き過ぎではないかと思われる程の「文学警察」のようなものまで創設しようと考えたJ.Śniadeckiがいた。またこの時代にはフランス風文体が好まれ、時にはその直輸入された文体が流行したが、そのような現象を強烈に皮肉ったのは、前述にすでに名前を挙げたJ.U.Niemcewiczである。

大略以上のような人々が、18世紀末の国家滅亡期のポーランドで活躍したわけであるが、これらの人々に交じって活動したコウォンタイとスターシツの活動の意義はどこにあったのであろうか、最後にそれを一瞥してこの小論を閉じることとしたい。

四年議會に権力を得ながら、その権力指向の強さ故にナポレオンに排除され、失意の晩年を迎えたコウオンタイと、最初活躍する場を与えられなかったが、しかしナポレオンにも仕え、一定の学術・教育部門で活躍したスターシツというように、おのおの活躍の内容こそ違いがみられるが、二人はともあれ科学者でありまた同時に行政官であった。マグナート・シュラフタの時代、貴族の「貴種」が物をいう時代はそろそろ終息を告げ、いよいよメリトクラシー、実力主義、能力主義による時代がやがて到来することを告げていた。一言で言えば能力主義に基づく官僚制である。そしてイエズス会の巨大な組織も終焉を迎え、国民教育委員会という、いわゆる省庁制もここに芽生えることとなった。こうした時代を背景に己自身その早期の代表者となりながら、能力に基づく国家官僚制を準備したのが彼らであり、まずもって彼らの存在意義はここにあったと結論づけて良いであろう。

(1994年5月)

注

[最初に主要参考文献を掲げ、注にはその番号とページ数のみを略記することにする。]

《主要参考文献》

- ① H.Koźłataj, Wybór pism naukowych, PWN, Kraków, 1953.
- ② S.Staszic, Pisma filozoficzne i społeczne I, PWN, Kraków, 1954.
- ③ R.Wroczyński, Dzieje oświaty polskiej do roku 1795, PWN, W-wa, 1983.
- ④ A.F.Grabski, Myśl historyczna polskiego oświecenia, PWN, W-wa, 1976.
- ⑤ M.Klimowicz, Oświecenie, PWN, W-wa, 1977.
- ⑥ Słownik literatury polskiego oświecenia, Ossolineum, Wrocław, 1977.
- ⑦ J.Lukowski, Liberty's Folly; The Polish-Lithuanian Commonwealth in the Eighteenth Century, Routledge, London and New York, 1991.
- ⑧ M.B.Biskupski and J.S.Pola, Polish Democratic Thought from the Renaissance to the Great Emigration: Essays and Documents, Columbia Univ. Press, 1990.

- ⑨ K.R.Wulf, Education in Poland, Univ. Press of America, Lanham, 1992.
- ⑩ S.Kot, Historia wychowania, t.II, Kraków, 1923.
- ⑪ Cz. Milosz, The History of Polish Literature, Univ. of California Press, London, 1983.
- ⑫ 中山昭吉、『近代ヨーロッパと東欧』、ミネルヴァ書房、1991.
- ⑬ 白木太一、「ポーランド国民教育委員会初期(1773-76)における身分別教育再編の試み」、『東欧史研究 第9号』、東欧史研究会、1986.
- ⑭ 土谷直人、「チャルトリスキの大学改革について」、『西スラヴ論集 第2号』、西スラヴ学研究会、1991.
- ⑮ 土谷直人、『ポーランド文化史ノート』、新読書社、1985.

《注》

- | | |
|------------------------|----------------|
| (1) 文献⑤による。 | (16) ②, 26-27. |
| (2) ⑫, 246. | (17) ②, 31. |
| (3) ⑫, 246. | (18) ⑮, 78-81. |
| (4) ①, 137-153. | (19) ②, 30. |
| (5) ①, 161-162. | (20) ②, 32. |
| (6) ①, 97-98, 157-158. | (21) ②, 32. |
| (7) ①, 158-161. | (22) ⑩, 57-58. |
| (8) ②, 303. | (23) ③, 207. |
| (9) ②, 4. | (24) ⑤, 381. |
| (10) ②, 13. | (25) ①, 76-77. |
| (11) ②, 24. | (26) ⑮, 89-91. |
| (12) ②, 21-23. | (27) ②, 31-33. |
| (13) ②, 23. | (28) ②, 227. |
| (14) ②, 25. | (29) ⑭, 38-39. |
| (15) ①, 195-197. | |